

行灯の明かりと庶民の暮らし

江戸時代は、地方はまだその恩恵にはあずかっていないが、大都市江戸に限れば、庶民の生活に夜を照らす草種油（菜種油、綿実油など）、魚油（イワシ、アブラザメなど）を燃料とする灯りが広く普及した時代であった。明り取りの道具も発達し、行灯、瓦灯、提灯、ぼんぼり、変わったところでは時代劇の捕りものに登場するガンドウ（強盗提灯）などがある。

それまで寺社と宮廷のものであった灯りが、庶民にもようやく手の届くものとなったのである。値段の高い順から言えば馨、蝋燭、草種油、魚油ということになるだろうか。ちなみに文化5（1808）年の記録ということで、「大江戸生活体験事情」（石川英輔・田中優子 著 講談社）では、「江戸で行商人から油を買うと一合（180ミリリットル）が四十一文だった。行灯の消費量は、四季の平均で一日に四勺か五勺（1勺は1合の1/10）だったそうだから、一日二十文として月六〇〇文、つまり、大工の日当、あるいは裏長屋の家賃ぐらいの金額が照明費としてかかったことになる」と紹

介している。

照明道具の概略は、「東京油問屋史—江戸のあかり」をご覧いただきたい。詳細は『燈火—その種類と変遷』（宮本馨太郎 朝文社）に詳しい。

ただ実際の明るさは、灯火の近くでやっと文字が読める程度であったようである。そういうわけで、大方の庶民の暮らしは、日没の暮れ六つには眠りにつき、日の出の明け六つには起き出して仕事へ出かける生活がまだまだ主流であったと思われる（江戸時代は日の出から日没までを昼間と夜間をそれぞれ六等分して時刻を刻む不定時法である）。行灯などに頼らず夜更かしせずに早起きするのは、油代「三文」の徳となったのであろうか。

治安の関係から夜間外出時は提灯を持つことが決められていたようで、持っていないと夜盗と間違えられたりして大変なことになる。

それでも、行灯の明かりで夜なべ仕事にいそしみ、また読み物などの楽しみの様子が当時の風物読み物から見てとれる。そして月夜の晩に誘われての外出は庶民の楽しみでもあったろう。



江戸府内 絵本風物往来
国立国会図書館 蔵



名所江戸百景 猿わか町よりの景 歌川広重
 国立国会図書館 蔵

← ■名所江戸百景 猿わか町よりの景
 歌川広重 国立国会図書館 蔵

↓ ■下図の行灯等の写真は（公財）日本のあかり博物館所蔵のものである。

「瓦灯」とあるのは、粘土をこねて焼き上げたもので、繊細な手作業を必要とする行灯などに比べると比較的安価であったと思われる。瓦のフードの中に灯明皿があり、普通は灯明皿を瓦灯の上部において、裸火の明りを取り、風があるときや寝るときにフードの中に入れたのではないかとされている。詳しくは、日本あかり博物館ノート No.33「瓦灯」にその考察が述べられている（「燈火・民俗見聞」山崎ます美遺稿集（日本のあかり博物館学芸員），発行所；ほおずき書籍（株））



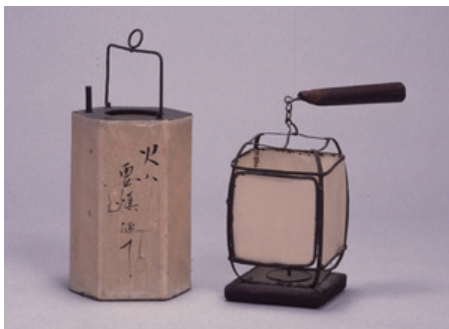
丸行灯



角行灯



遠州好み角行灯



手提げ提灯



瓦灯



ガンドウ

■また行灯のある庶民の暮らしぶりは、江東区深川江戸資料館の展示より紹介する。



八 間：中央に灯明皿が見える



角行灯：行灯の底に灯明が置かれている
その下に油差しが置かれている



江戸庶民の住まいを再現したようす



行灯の灯芯



上記の写真は、行灯の中の灯心を写したものである。深川江戸資料館の学芸員の方の手作りである。灯心には井草が使われる。

丁度撮影に訪れた時に江東区深川江戸資料館では、当時の深川の街並みが再現されていた。江戸庶民の生活を知るうえで一度は足を運びたいところだ。

←■左の写真は、深川にあった十組間屋「多田屋」を復元したもので、干鰯（ほしか）メ粕・魚油問屋である。